

天プラの挑戦 5.

天プラ流・サイエンスカフェの試み

塚田 健 (東京学芸大学) 高梨 直紘、平松 正顕 (東京大学) tenpla.net

The TENPLA Project 5. Science Cafe

K. Tsukada (Tokyo Gakugei University),
N. Takanashi, M. Hiramatsu (University of Tokyo), and tenpla.net

Abstract

In recent years, “Science café” is making popularity as a new way of dissemination of science, in Japan. And then, “tenpla” implement multiple “Science café” for different age levels, in this trend. In this paper, I review “Science café” ever before by “tenpla”, and introduce Science café’s image would think “tenpla”.

1. Introduction

「サイエンスカフェ」とは？

そもそも、サイエンスカフェとはどんなものなのだろうか？

もともとサイエンスカフェは、イギリスやフランスではじまった「Café Scientifique」に由来している。Café Scientifique は、「一杯のコーヒーやワインを片手に、誰もが最新の科学や技術についての探求ができる」場所であり、そこは「カフェやバー、レストランや劇場などであって、旧来の学問的な背景の外」の場所であると言われ、また、Café Scientifique は、「科学の問題について議論する場」であって、「科学のショーウィンドウ」ではない、と言われる。(Café Scientifique の web ページより)

つまり、もともとのサイエンスカフェとは、「気軽にコーヒーなどを飲みながら、科学や技術についてその場にいた人どうしが議論し合う」場なのである。

サイエンスカフェ Café Scientifique

取り上げられたテーマに対する専門性を有する講師側と、専門知識を有しない(というと語弊があるかもしれないが)一般参加者側では、対等な議論は成立しにくい。参加者間であれば既有知識にそこまでの差はないかもしれないが、日本の国民性もあるのか、参加者同士の議論にも発展しにくい。特に、「天プラ」が対象としている天文学をはじめとする基礎科学は、遺伝子組み換え食品問題や環境問題などとは異なり、そもそも議論になりにくい分野でもある。そのため、日本で行われているサイエンスカフェは、本家の Café Scientifique とは異なり、くつろいで質問しやすい雰囲気の中、研究者がやさしく科学の話をする、そのような雰囲気の中、科学の話題で時を過ごす、というものが多い。

そういうものは、ただの講演会であって、サイエンスカフェではないという意見もある。しか

し、大事なのは、まずは気軽に科学に触れる機会を提供すること、そして興味を持ってもらうことであると思う。壇上で先生が話すのをただ聞いているだけではなく、同じテーブルを囲んで話し、素朴な質問をぶつけることに意義がある。「天プラ」の趣旨も、「最新の天文学をより身近に楽しむ機会の提供」であり、以下に紹介するように、我々が行ってきたサイエンスカフェは、まさにその狙いを実現しようとしたものである。

2. Overview

ここでは、これまで「天プラ」が行ってきたサイエンスカフェ（それに類するイベントを含む）を、時間を追って概観する。

サイエンスカフェ @ みんたる

2005.10.6

「みんたる」は、北海道大学近くの雑貨屋&ネパール料理のレストランで、店内にいたお客さん相手に実施（写真 1）。メインで話す大学院生はいたが、質問も数多く出され、まわりの学生も話に参加するなど、議論とまではいかないまでも、人数も少なく、お店の雰囲気などもあって大いに盛り上がった。



写真 1 サイエンスカフェ@mんたるの様子

サイエンスカフェ with CoSTEP

2005.10.8

北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット（CoSTEP）と共催で、札幌駅前の紀伊國屋書店札幌本店で開催。200人以上の来場者があり、盛況のうちに終わることができた（写真 2・3）。

はじめに渡部潤一氏（国立天文台）の講演があり、その後、大学院生による話題提供を含めたフリートークの時間を設定（写真 4）。フリートークの時間は学生が来場者の中に入っていき、それぞれ天文学の話に花を咲かせた。

「天プラ」としても、このようなサイエンスカフェの開催はこのときがはじめてであり、会場



写真 2・3・4 サイエンスカフェ@紀伊國屋書店の様子

内配置や時間配分の見積り甘さ、来場者が多かったときの対応など、多くの反省点があったが、これも実施したが故に見えてきたものであり、その後、試行錯誤を重ねていく上での貴重な経験となった。

サイエンスカフェ @ 雑多楽や

2006.2.20

三鷹市内にあるレストラン「雑多楽や」で、三鷹市の子育て NPO の方たちを対象に行ったミニサイエンスカフェ。参加者は NPO の方たち 6 名 + 「天プラ」メンバー 5 名という少人数であり、プロジェクターやスクリーンは一切使わず、全員で PC 画面をのぞきこむというスタイルで行った。

子育て NPO の方たちは皆、現役のお母さんお父さん。小さいお子さんをお持ちの方たちなので、なかなか空き時間もなく（今回設定した時間は、お子さんを幼稚園等に送ったあと昼食までの時間）子ども連れでは科学館等で行われている天文教室に行けないことが多い。そういう方たちが気軽に参加できる形態として、このような集まりは非常に有効であると考えられる。

また、今回は少人数であるが故に、気軽な感じで終始会話が繰り広げられていた。サイエンスカフェのコンセプトのひとつに「講師側と参加者側のコミュニケーション」というのが挙げられるのであれば、このような小さい会場で、少人数で実施することが望ましいかもしれない。

サイエンスカフェ @ 大原美術館

2006.4.23

日本におけるサイエンスカフェの定着をはかるため、科学技術週間に合わせて、日本学術会議が旗振り役となって、北は北海道から南は沖縄まで、全国 20 カ所で同時期にサイエンスカフェが開催された。その中のひとつとして、倉敷でのサイエンスカフェを「天プラ」で企画・運営した。



写真 5 対談の様子



写真 6 参加者と話す海部前国立天文台長と青柳国立西洋美術館長

会場は、倉敷市内の大原美術館。名画に囲まれてのサイエンスカフェとなった。前半は海部前国立天文台長と青柳国立西洋美術館館長との対談（写真5）。テーマは「人は宇宙をどう捉えてきたか」。後半は二人を交えたコーヒー片手のフリートークセッションという流れ（写真6・7）。当日の詳細や参加者へのアンケート結果は、『科学技術週間サイエンスカフェ実施報告書』を参照して欲しい。

3. Our Concept

以上のように複数回のサイエンスカフェを重ねることによって、我々が目指すサイエンスカフェとはどういうものかをつかむことができた。

まずは、「学生」という身分を最大限活かすこと。サイエンスカフェ@みんたるでは、「なんで君たちは天文学やってるんだ？」「何を狙ってるんだ？」という質問を受けた。このような質問は、偉い先生が壇上で話す講演会ではなかなか生まれないが、科学とは何か、科学者は何がしたいのかという基本に迫る質問であろう。一般の参加者は、講師側にそのつもりがなくても、肩書き等で壁を感じてしまうものである。しかし、サイエンスカフェの狙いのひとつが「講師側と参加者側のコミュニケーション」。我々学生が話すことによって、大教授などにはできない、気軽に声をかけて質問できる話者になることができると考えられる。

さらには、会場の広さ・参加者の人数と講師側の人数の兼ね合いである。サイエンスカフェは各地で行われ、この形が正解というものはない。しかし、コミュニケーションという観点から見ると、小さな会場で少人数で行うことが良いという印象を、“みんたる”や“雑多楽”でのサイエンスカフェで受けた。その方が参加者同士も近く、話がしやすいと思われる。逆に参加者が多い場合は、講師側の人数を増やすべきである。CoSTEPとの共催で行った札幌でのサイエンスカフェでは、「天プラ」の学生ネットワークを活かして、20人を近い学生が参加者の中に入っていた。こうすることによって、参加者全員が講師側と話すことができると考えられる。

これからも「天プラ」は、「天プラ」の趣旨と以上のようなコンセプトに沿ってサイエンスカフェを行っていく予定である。興味のある方はぜひ声をかけていただきたい。